

修士論文（要旨）
2012年1月

なぜ介護職員は看護師を志向するのか
—介護福祉士が誇りを持って働ける環境とは—

指導 杉澤秀博 教授

老年学研究科
老年学専攻
209J6005
宮崎和美

要旨

本研究は、特別養護老人ホームに勤務する介護福祉士が、なぜ看護師を志向するようになるのか、そのプロセスを明らかにし、介護福祉士が誇りを持って働ける環境の提言を行うことを目的に、修正版グランデッドアプローチを用いて行った質的研究である。

特別養護老人ホームに勤務する3年以上の経験を有する介護福祉士9名を対象に、半構造的面接によりインタビューを行った。主な質問は、介護の仕事への思い、看護師とのやりとりで感じる事、看護師になりたいと考えた経験はあるか、看護師になりたいという気持ちは分かるか等であった。インタビューの結果、看護師になりたいと思ったことがある人が9人中7人、看護師になりたいという気持ちの分かる人を含めると全員が該当していた。

分析の結果、看護師志向を促進するものとして【医学的知識が介護業務の限界を打破する】【介護職員の影響の乏しさ】【看護職のより良い労働条件】【介護資格の弱さ】という4つのカテゴリーが生成された。しかし介護福祉士はその志向をもつだけでなく、【看護師志向を調整する】というカテゴリーが生成され、＜介護職のもつ優位性に気づく＞＜看護と介護の上下関係にない＞＜看護業務の矮小化＞という認知的な変容を行うことで、その志向を弱めていこうという営みも行っていった。

看護師志向を促進するカテゴリーのうち、【介護職員の影響力の乏しさ】には、介護職自身の介護職に対する自己評価の低さが起因していた。【介護資格が弱い】という認識が[ケア計画は看護師の方針が優先]し、[ケア場面以外でも看護職員が上]という状況を作り出していた。また介護福祉士はその養成カリキュラムにおいて医学的知識の比重が小さい。しかしながら特別養護老人ホームの利用者は医療依存度が高いため、[ケア計画は看護師の方針が優先]するため、医学的知識を身に付けて自分のケアを実践したいと考え、看護師への志向が促進されていた。また、高齢で、医療依存度が高い利用者に対して、医学的知識があったとしても、有効な手立てが講じられる訳ではないが、[資格取得の容易さ]があるため、全ての原因を「医学的知識が無いこと」に帰結し、[無力感を解消する手立て]として、【医学的知識が介護業務の限界を打破する】が生じる。また、介護福祉士は[成長の実感が得にくい]ため、[自分の対応範囲を拡大]することで、成長の実感を得ようとしていた。なお【看護師志向を調整】におけるサブカテゴリー＜介護職のもつ優位性に気づく＞＜看護と介護の上下関係にない＞＜看護業務の矮小化＞の3つは互いに独立していた。

また、本研究では介護福祉士は看護師志向を継続して強く持ち続けるのではなく、それを調整する認識をもっていることが示唆された。介護福祉士が誇りを持って働ける介護現場になるためには、「賃金の改善」だけでは不十分である。介護福祉士を他の国家資格と同様の強い資格にすること、現場のケア業務は看護師・介護職の相互が納得しながら役割分担していくこと、そして介護職の持つ利用者の生活情報について、介護福祉士自身が「医学的知識と同等の価値がある」ということに気付き、他職種もそれを正当に評価する関係にまで、成長していくことが必要ではないだろうか。その環境でこそ、介護福祉士が誇りを持って働いていけると考える。

文献

- ・厚生労働省 http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/fukusijinzei_0001.pdf
：「社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に関する基本的な指針」
（平成 19 年 8 月 28 日厚生労働省告示第 289 号）の見直しについて。（2007）
- ・財団法人介護労働安定センター
（http://www.kaigo-center.or.jp/report/h19_chousa_01.html）
：平成 19 年度介護労働実態調査。
- ・財団法人介護労働安定センター
（http://www.kaigo-center.or.jp/report/h20_chousa_01.html）
：平成 19 年度介護労働実態調査。
- ・厚生労働省（<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/9-19-2.html>）
平成 19 年度雇用動向調査。
- ・古川和稔：介護職の離職防止に向けた支援と方策－離職原因を分析し、効果的に介入する方法－。介護人材 Q&A, 59(6)：(2009)。
- ・三原博光，横山正博，峯本佳世子：特別養護老人ホームにおける寮父母の介護意識について。山口県立大学看護学部紀要,4：20-25(2000)。
- ・井上千鶴子：看護と介護の連携。老年社会科学, 28(1)：29 - 34(2006)。
- ・本間美幸，八巻貴穂，佐藤郁子：介護福祉士の専門性に関する研究－福祉施設介護責任者の意識調査結果から－。人間福祉研究, 11：(2008)。
- ・久保真人：ストレスとバーンアウトの関係－バーンアウトはストレンか？－。産業・組織心理学研究, 12(1)：5-15 (1998)。
- ・矢富直美，中谷陽明，巻田ふき：老人介護スタッフのストレス評価尺度の開発。社会老年学, 34：49-59
- ・田尾雅夫：組織の心理学。有斐閣,67-73 (1999)。
- ・厚生労働省（<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/12/s1222-4d34.html>）
特別養護老人ホームにおけるターミナルケアの現状。第 7 回社会保障審議会介護保険部会, (2003)。
- ・厚生労働省（<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0331-14a.pdf>）：特別養護老人ホームにおける看護職員と介護職員の連携によるケアの在り方に関するとりまとめ。(2010)
- ・林信治：医療的ケアに関する介護福祉士の対処の現状と意識。厚生指針, 50(8)：(2003)。
- ・林千冬：日本における看護・介護職者の就業構造と労働の変化。日本労働社会学年報：59 - 82 (2002)
- ・鎌田ケイ子：問われる看護職の責任の重さ－全国高齢者ケア協会が実施した「介護職による医療行為」の実態調査から。訪問看護と介護,12(12)：2007。
- ・大串靖子，大和田猛，一戸とも子：老人施設における看護職員と介護職員の職務の連携と分担－職務意識からの分析－。弘前大学教育学部紀要, 77：63-75(1997)。
- ・吉田千鶴子，千田睦美：特別養護老人ホームにおける看護職員の専門性に関する研究－看護と介護に関する調査－。岩手県立大学看護学部紀要：121-134 (2000)。